

7月19日 年間第16主日 マタイ13章24～43節 毒麦を駆逐する方法は？

今日の福音朗読は先週に続く箇所です。短い福音朗読の形では毒麦のたとえだけですが、長い形ではそれに二つの天の国のたとえ話と、毒麦のたとえ話の解説からなります。この解説も初代教会で付け加えられたものと考えられているので、ここでは三つのたとえ話を中心に述べさせていただきます。

先週とは種まきつながりで、毒麦のたとえ話から始まります。麦の種をまいた畑に敵が夜にやってきて毒麦をまいた、という出来事です。敵の行為は主人に打撃を与えるためのものですが、なんだかみみっちいいやがらせをしますね。実は毒麦は実が実る前はよい麦となかなか見分けがつかないそうです。成長するとわかりやすくなるということなので、主人が「育つままにしておきなさい」というのにはそういう理由もあったそうです。とはいえ、毒麦も育てるとなると養分も奪われますし、肥料も無駄使いすることになります。やっぱり意地の悪いいやがらせですね。

このたとえは人間社会を表していると考えられます。「だれが毒麦なのか」という犯人捜しをするようなパターンを考えると、SFなどで宇宙船乗組員の中にスパイや宇宙人が混じっていることが判明し、メンバーを疑心暗鬼にさせるというシチュエーションがありますね。だれが味方でだれが敵であるかを見極めながら戦う人狼ゲームもそうですね。敵の目的もそこにあるのではないのでしょうか。人間社会を不安にさせ、疑心暗鬼にさせて混乱させることこそが敵の思う壺なのです。

それに対し、あとの二つは天の国（神の国）についてのたとえ話です。毒麦のたとえのあとなのでほっとする内容ですね。からしだねもパンだねも小さいものが大きくなるというたとえです。これらのたとえは毒麦のたとえと対照的です。毒麦がこの世に悪を広げていくのに対し、からしだねとパンだねは神の愛を広げていくものです。多くの人は毒麦のたとえのほうが現実的だと思うかもしれませんが、現代社会の状況をみると、まさに毒麦がはびこっているように思います。しかし、神の計画は、そのような毒麦を終わりの日に取り除くことです。最後の説明によると、毒麦は悪魔によってまかれた悪人を表しているということですが、神はまた悪を行う人の回心を望まれているはずです。むしろ、神が最後に取り除かれるのは、わたしたちのうちにある悪と罪だと考えられるのではないのでしょうか。人を指して「あいつは毒麦だ」と裁くのではなく、悪人を裁くのは神がなさることです。だから、「刈り入れまでそのままにしておきなさい」と言われたのだと思います。

では、わたしたちはどのようにこの世の悪に打ち勝つことができるのでしょうか。その答えが二つのたとえにあります。この世に神の国のからしだねとパンだねを育てていくことによって、毒麦が育つ余地がなくなっていくのです。人を裁くのではなく、この世に神の愛を広げることが神の国への近道なのです。（柳本神父）